

報 告

老年看護学病院実習における学生の学び

鈴木 早智子¹⁾ 清水 千代子²⁾

¹⁾足利大学 看護学部 ²⁾前足利大学 看護学部

要旨

【目的】本研究は、老年看護学病院実習における学生の学びを明らかにし、老年看護学実習指導の充実に向けた基礎資料とすることを目的とする。

【方法】A大学3年生の老年看護学病院実習を履修し、同意の得られた143名を対象に、高齢患者の概要と実習からの学びで得たことについて内容を検討した。

【結果】学生の学びとして、【加齢に伴う個体差】【対話することの関係性】【高齢者のニーズや希望に応じる支援】【看護実践力の必要性】【自分の世界を生きる】【高齢者の生活を支える視点】【多職種連携・協働】【社会的ネットワークとサポート】【学生自身の自己課題の発見】というカテゴリが導き出された。

【結論】学生の学びの内容から実習の重要性が確認された。高齢者、家族の多様化・変化が進むなかで、高齢者を全人的に捉える能力が求められるが、より広いフィールドでの実習方法の検討が必要である。さらに地域包括ケアシステムの推進に向けた多職種の専門職連携教育の実践が必要である。

キーワード：老年看護学実習，病院，レポート，学生の学び

I. はじめに

現在のわが国は、高齢者の人口割合が65歳以上27.3%、75歳以上13.3%で超高齢社会となっている¹⁾。団塊の世代が65歳を超え高齢者人口が増加している65～74歳の高齢者は、身体的にも社会的にも十分な活動をしている人が多く、この年代の人たちは自ら活動し社会で活躍する人も多い²⁾。その一方で、2017年の患者調査の概況では、病院へ入院した患者は1,272,600人であり、そのうち65歳以上は933,300人と73.3%を占め、入院する高齢者の増加が顕著にみられる³⁾。今後、現在の高齢者受療率や有訴者率を考えると、保健医療福祉ニーズが高くなり、これらが社会的な課題である。また2035年問題といわれる高齢化率の上昇、医療従事者への過度な負担などの重要課題もある⁴⁾。このような背景から、老年看護学の果たす役割は大きくなっている。

2011年文部科学省の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会の最終報告」の学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標では、5つの能力群と、20の看護実践能力を示し⁵⁾、看護実践能力の育成における課題のなかで、「すべての看護師等には主体的に考え行動できる能力を、生涯を通じて獲得していくことが求められている⁶⁾と述べられている。様々な健康問題を抱えた対象者に根拠に基づく看護を展開する能力は、看護実践場面をととして育まれるため臨地実習が重要になる。先行研究では、老年看護学臨地実習における学生の困難状況や指導上の課題等^{7,8)}が報告されてきた。老年看護学教育の難しさは、学生たちが体験をしたことのない老年期について学ぶことである。老年看護学教育において看護実践能力の涵養に臨地実習の果たす役割は大きく、その教育方法の工夫が必要であると考えられる。

本学は平成26年に開学し、平成28年度より老年看護学実習を開始している。老年看護学の実習は、医療施設である急性期病院の一般病棟、回復期病棟での病院実習に加え、福祉施設で生活する高齢者を理解する目的で、特別養護老人ホームおよび介護老人福祉施設にて実習を実施

している。このような方法で行われた実習において、各施設でどのように学ぶことができるのか、また学ばせることが効果的なのかを検討することが必要である。そこで、病院実習における学生の学びを明らかにすることは、今後の老年看護学実習指導の充実に向けて意義があると考えられる。

II. 目的

本研究は、老年看護学病院実習における学生の学びを明らかにするとともに、老年看護学実習指導の充実に向けた基礎資料とすることである。

III. 研究方法

1. 対象者

A看護大学3年生で、平成28年度、平成29年度に老年看護学病院実習を履修し、研究の趣旨に同意が得られた143名を対象とした。

2. 老年看護学実習の概要 (表1)

老年看護学実習(4単位180時間)は、3年次の前期・後期に位置づけられている。平成28年度、平成29年度の老年看護学実習の目的は、様々な健康レベルにある高齢対象者を理解し、個別性を尊重した自立支援やQOL向上を目指した看護を実践できる基礎的能力を養うことである。目標は、1. 加齢に伴う変化や健康障害をもつ高齢者を多面的・総合的に理解することができる、2. 高齢者の健康レベルに応じて生活機能を維持・回復するための援助ができる、3. 高齢者の個性を尊重し倫理的配慮をもって看護実践できる、4. 高齢者やその家族と適切にコミュニケーションをとる事ができる、5. 高齢者の多様な療養の場に応じた看護の役割・機能を理解することができる、6. 日常生活への援助を通して、対象の関わりを通して、高齢者のQOL向上を目指した看護とは何かを具体的に考えることができる、である。内容は、医療施設実習および保健・福祉施設実習を実施する。医療施設である病院実習の具体的な方法は、65歳以上の高齢者を1名受け持ち、看護過程の展開を行う。実習期間は2週間で

表 1. 老年看護学実習の概要

<p>I. 実習目的</p> <p>様々な健康レベルにある高齢対象者を理解し、個別性を尊重した自立支援や QOL 向上を目指した看護を実践できる基礎的能力を養う。</p> <p>II. 実習目標</p> <ol style="list-style-type: none">1. 加齢に伴う変化や健康障害をもつ高齢者を多面的・総合的に理解することができる。2. 高齢者の健康レベルに応じて生活機能を維持・回復するための援助ができる。3. 高齢者の個別性を尊重し倫理的配慮をもって看護実践できる。4. 高齢者やその家族と適切にコミュニケーションをとる事ができる。5. 高齢者の多様な療養の場に応じた看護の役割・機能を理解することができる。6. 日常生活への援助を通して、対象の関わりを通して、高齢者の QOL 向上を目指した看護と何かを具体的に考えることができる。 <p>(平成 28, 29 年度 老年看護学実習要項より抜粋)</p>
<p>具体的内容</p> <ul style="list-style-type: none">・ 1 名の高齢者を受け持ち、看護過程を展開し、看護実践を行う。・ 実習 1 週目 中間カンファレンスを行う。 関連図から看護問題の明確化、看護計画等のディスカッション・ 実習 2 週目 最終カンファレンスを行う。 実施した看護の振り返りと実習での学びを発表し全体ディスカッション・ 実習グループごとにテーマを設定し、30 分～60 分かけて学生主体のグループワークおよびディスカッションを毎日行う。

い、1週目は具体的な情報収集とアセスメントを行い、個別性を踏まえた看護計画を立案する。2週目は実践した看護を評価し、必要に合わせて修正をしていく。実習中は、行動計画を毎日作成し、実習指導者および担当教員と共有する。またカンファレンスを設け、学生の受け持つ高齢者の意向を含めた看護計画、実践した看護技術の方法についてディスカッションする機会を設けている。この場には実習指導者と担当教員が参加し、多職種目標達成を含めて意見交換を行う。実習終了時には、実習の学びを発表し、ディスカッションを行う、という学習内容である。実習病院は2病院3病棟において行われた。

3. データ収集方法

2週間の老年看護学病院実習の終了後に学生に課している「身体的、精神的、心理的、社会的な変化が起きた高齢者の状況と看護の役割を考察する」をテーマとする1,600字程度のレポートをデータとした。また、学生の受け持ち記録より高齢者の概要（性別・年代・病名）についてデータを抽出した。

4. 分析方法

分析対象となった学生の受け持ち記録より高齢者の概要（性別・年代・病名）を整理した。また老年看護学病院実習におけるレポートから、学生が学びとして表現していた内容を抽出してコード化し、内容の類似するものをまとめてサブカテゴリ、カテゴリと抽象度を上げ検討を行った。また、真実性の確保のために、共同研究者による討議を行い、それぞれのカテゴリの内容の妥当性を検討した。分析結果の信頼性・妥当性を高めるため、質的研究経験を持つ研究者のスーパーバイズを受けながら検討を重ねた。

5. 倫理的配慮

研究者が所属する施設の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号第14号）。研究対象者に、研究の主旨、研究方法、匿名性の保持、自由意思の尊重と拒否ができること、研究参加の有無により成績に影響がないこと、実習評価を

つけた後に研究の対象とすることなどを口頭と文書とで説明し、同意を得た。データは、鍵のかかるボックスに保管し、氏名等の個人情報は符号化し、個人が特定されないよう十分に配慮すること、研究結果は学会等学術目的での発表がされることなどを説明した。

IV. 結果

1. 学生の受け持ち高齢患者の概要

学生の受け持ち高齢患者の性別は男性54名(38%)、女性89名(62%)であり、年代は70歳代43名(30%)、80歳代73名(51%)、90歳代26名(18.2%)、100歳代1名(0.8%)であった。主な病名として骨折、次いで脳梗塞、脳出血などの脳神経系に関する疾患や肺炎などの呼吸器疾患や悪性新生物(がん)、認知症などであった。

2. 老年看護学病院実習での学生の学び(表2)

老年看護学病院実習での学生の学びとして902のデータが抽出され、コード化した。それらを意味が類似する内容ごとに集めて、26サブカテゴリに分類し、最終的に【加齢に伴う個体差】【対話することの関係性】【高齢者のニーズや希望に応じる支援】【看護実践力の必要性】【自分の世界を生きる】【高齢者の生活を支える視点】【多職種連携・協働】【社会的ネットワークとサポート】【学生自身の自己課題の発見】の9カテゴリが抽出された。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを《 》, コードを[]を示す。

1)【加齢に伴う個体差】

【加齢に伴う個体差】は、学生が受け持ち高齢患者との関わりを通して深めていった高齢者の特徴についての理解である。《高齢者の特徴理解》、《高齢者の思いの推察》、《複数の慢性疾患併存の理解》が抽出された。《高齢者の特徴理解》では、[高齢者の身体的特徴を知る]、[高齢者の心理的特徴を知る]などの記述がみられた。《高齢者の思いの推察》では、[今までできた事ができなくなる不安や苛立ちを知る]や[我慢するしかない]、[迷惑をかけたくない思いを知る] [死を意識していることを知る]などの

表2. 学生の学び (n=902)

【カテゴリ】9	《サブカテゴリ》26	コード数
加齢に伴う個体差	高齢者の思いの推察	101
	複数の慢性疾患併存の理解	56
	高齢者の特徴理解	37
対話することの関係性	傾聴から関係性を構築する	42
	敬意をもって対話を重ねる必要性	40
	非言語的コミュニケーションの必要性	11
高齢者のニーズや希望に応じる支援	高齢者のニーズの把握の重要性	53
	その人の心に寄り添う	25
	「今」必要な援助を見極める力	18
	安心できる援助の必要性	16
看護実践力の必要性	高齢者への個別的な看護実践	70
	意欲を高めるリハビリテーション看護の実践	54
	高齢者の状況に合わせた技術の必要性	42
自分の世界を生きる	高齢者の尊厳への配慮	43
	老年観の再認識	17
高齢者の生活を支える視点	高齢者のできることに着目した自立支援	37
	その人らしい生活の視点の理解	22
多職種連携・協働	個別ケアのための多職種連携・協働	61
	看護職に求められる連携力	8
社会的ネットワークとサポート	入院時からの退院支援の必要性	21
	家族への支援	21
	高齢者の背景に応じた社会資源の活用	14
学生自身の自己課題の発見	学びの深まり	31
	個別性のある看護の重要性を実感	26
	継続的課題の明確化	25
	人との繋がり大切さ	11

記述がみられた。《複数の慢性疾患併存の理解》では、[既往歴が多く、複数疾患をもっている]や[個人差が大きいと再認識した][高齢者個々の症状や経過の違いがわかる][バイタルサインと観察の重要性の認識][援助の効果が現れにくいと感じる][薬物事象との区別が難しい]の記述がみられた。

2)【対話することの関係性】

【対話することの関係性】は、《敬意をもって対話を重ねる必要性》、《傾聴から関係性を構築する》、《非言語的コミュニケーションの必要性》が抽出された。《敬意をもって対話を重ねる必要性》では、[尊重の気持ちをもって会話する]や[日頃からのコミュニケーションの機会をもつ][相手のペースに合わせる]の記述がみられた。《傾聴から関係性を構築する》では、[不満や不安を傾聴する]や[会話は少なくとも身体に触れ、声かけをすることで信頼関係は深まった]などの記述がみられた。《非言語的コミュニケーションの必要性》では、[非言語的コミュニケーションの重要性を学ぶことができた][話しやすい、温かな環境づくり]の記述がみられた。

3)【高齢者のニーズや希望に応じる支援】

【高齢者のニーズや希望に応じる支援】は、《安心できる援助の必要性》、《高齢者のニーズの把握の重要性》、《「今」必要な援助を見極める力》、《その人の心に寄り添う》が抽出された。《安心できる援助の必要性》では、[安心感の表出ができるような話しやすい環境づくり]の大切さの記述がみられた。《高齢者のニーズの把握の重要性》では、[対象者が何を必要としているのかを考えていく重要性を知る]の記述がみられた。《「今」必要な援助を見極める力》では、[患者の状況を考えながら援助内容を判断する]の記述がみられた。《その人の心に寄り添う》では、[人間の心は常に揺れ動いていることを実感した]や[寄り添うことの大切さ]を学んでいた。

4)【看護実践力の必要性】

【看護実践力の必要性】は、《意欲を高めるリハビリテーション看護の実践》、《高齢者への個別的な看護実践》、《高齢者の状況に合わせた技

術の必要性》が抽出された。学生と高齢患者が対面するとき、リハビリテーションをしている最中である。《意欲を高めるリハビリテーション看護の実践》における[ADL支援]、[残存機能]、[転倒リスク]の知識と技術の必要性について学び、リハビリテーションの関わりから見守り、患者にとって本当に必要なことは何かを考える[アセスメントの必要性][イメージしやすい声かけ][楽しみを見つけるケア内容]など《高齢者への個別的な看護実践》の必要性や[休息をとり実践する]など《高齢者の状況に合わせた技術の必要性》を学んでいた。

5)【自分の世界を生きる】

【自分の世界を生きる】は、《高齢者の尊厳への配慮》、《老年観の再認識》が抽出された。《高齢者の尊厳への配慮》では、認知機能が低下していても[自尊心への配慮]をして支えることや[人生の先輩]として関わることで、高齢者一人ひとりの[価値観の違いを知る]ことができ《老年観の再認識》ができていた。

6)【高齢者の生活を支える視点】

【高齢者の生活を支える視点】は、《高齢者のできることに着目した自立支援》、《その人らしい生活の視点の理解》が抽出された。《高齢者のできることに着目した自立支援》では、学生の介入経験より[高齢者のできる部分を見つけることを考える]ことに繋がり、[自立支援の必要性を知る]ことができた。[趣味]や[どんな生活をしてきたのかを考える]ことで《その人らしい生活の視点の理解》ができていた。

7)【多職種連携・協働】

【多職種連携・協働】は、《個別ケアのための多職種連携・協働》、《看護職に求められる連携力》が抽出された。多職種カンファレンスの見学を通して、医師、看護師、リハビリスタッフ、MSW等のチーム体制から、[自分の専門以外に対する理解の重要性を学ぶ]ことで、それぞれの専門的立場、関わりから得られた情報をいかに共有化し、高齢者の理解、ケアに繋げていくかなど[看護者としての代弁者]となり、《個別ケアのための多職種連携・協働》の意義や《看護職に求められる連携力》の必要性が記述され

ていた。

8)【社会的ネットワークとサポート】

【社会的ネットワークとサポート】は、《入院時からの退院支援の必要性》、《家族への支援》、《高齢者の背景に応じた社会資源の活用》が抽出された。《入院時からの退院支援の必要性》では、[入院中から退院後の生活を考慮した援助]や[退院後の生活を見据える]ことが記述されていた。[家族への心理面を支え]ながら《家族への支援》を行い、高齢患者や家族が、安心して入院治療に専念でき、[患者への有効な情報提供のあり方を知る]ことで退院後の心配を解決できるよう《高齢者の背景に応じた社会資源の活用》方法の記述がされていた。

9)【学生自身の自己課題の発見】

【学生自身の自己課題の発見】は、《学びの深まり》、《継続的課題の明確化》、《個別性のある看護の重要性を実感》、《人との繋がり大切さ》が抽出された。《学びの深まり》では、[高齢者の疾患に関する知識の確認]ができ、[介入の難しさ]を体験して、改めて自己の《継続的課題の明確化》することができた。高齢患者から[実習生による気遣い]の言葉をかけてもらい[ケアへの感謝を感じる]ことができ《個別性のある看護の重要性を実感》することができた。[患者からの言動でやりがいを感じる]学生は、《人との繋がり大切さ》を学んでいた。

V. 考察

1. 学生の受け持ち高齢患者の概要

受け持ち高齢患者の性別は、わが国の高齢者人口の男女比に反映していると考えられる。年代は、80歳代から100歳代で全体の7割を占め、学生のほとんどは老年看護学病院実習において、超高齢者を受け持ちすることができていた。WHOは85歳以上を超高齢者と分けている⁹⁾。超高齢者は、生理的機能の低下がさらに進み、病的な状態に結び付きやすくなる特徴を顕著に有していると考えられ、学生は加齢の特徴と老化の現象を現実的に体験できる実習環境であったと思われる。病名は、骨折、次いで脳梗塞、脳出血など脳神経系に関する疾患や肺炎などの

呼吸器疾患やがん、認知症であった。高齢者の受療率が高い主な傷病は、入院が「脳血管疾患」「悪性新生物(がん)」¹⁰⁾を反映しており、高齢者が健康逸脱する身体疾患として講義・演習で学修している事例であった。舟島は、看護基礎教育における授業形態は、講義、演習、実習からなるが、その中でも看護学実習は、学生の基礎的な看護実践能力習得に不可欠な授業であり¹¹⁾、宮地らは¹²⁾、教育は講義・演習・実習と一連の授業形態のもとに教育内容を相互に関連させながら進めていくものである、と述べている。演習と同じ事例を受け持ち、学んでいる学生は、教育内容を段階的に関連づけて深められたと思われる。

2. レポートを通しての病院実習の学び

学生は老年看護学病院実習を通して、多くの学びを得ていた。

1) 加齢に伴う個体差

学生は講義・演習を履修しており、加齢変化や一般的な高齢者の特徴についての知識をもって実習に臨んだ。そのうえで実際に高齢患者と接することは、想像するしかなかった老化現象を確かめながら《高齢者の特徴理解》ができ、《複数の慢性疾患併存の理解》をする側面に着目し、既存の知識と関連づけができたと考えられる。千葉らは¹³⁾、高齢者の特徴理解では、身体的側面の理解から高齢者の思いの推察したことを報告している。本研究でも《高齢者の思いの推察》として[今までできた事ができなくなる不安や苛立ちを知る][我慢するしかない]という高齢患者の葛藤や思いを理解することができていた。また学生は、他の年齢層に比べ高齢者の個人差が大きいことに気づき、【加齢に伴う個体差】として高齢者を個として捉えることができていたと思われる。

一方で、三輪らは¹⁴⁾、ゆとり世代への教育は、高齢者との接触がいちじるしく乏しい学生が存在することを考慮する必要性を報告している。《複数の慢性疾患併存の理解》は[既往歴が多く、複数疾患をもっている][個人差が大きいと再認識した][高齢者個々の症状や経過の違いが

わかる] [バイタルサインと観察の重要性の認識] [援助の効果が現れにくいと感じる] [薬物事象との区別が難しい] の6コードより、学生によっては、加齢に伴う変化と複数の病態が絡みあうことは、身体的側面を理解することも難しいと考えられる。学生の世代の特性を踏まえ、継続的に講義・演習を通して加齢に伴う個体差を認識できるように教授していく必要があると考えられる。

2) 対話することの関係性

受け持ち高齢患者と1対1で [日頃からのコミュニケーションの機会をもつ] ことによって、お互いの緊張が自然とほぐれ、《敬意をもって対話を重ねる必要性》に気づき、[不満や不安を傾聴する]、[会話は少なくとも身体に触れ、声かけをすることで信頼関係は深まった] など《傾聴から関係性を構築する》ことを実感していた。ゆっくり話して、ゆっくり聴くように心がけることは、高齢患者との対話ができ、自然と声をかけ、身体に触れようとする行為を導きだしたと考えられる。《敬意をもって対話を重ねる必要性》として [相手のペースに合わせる] という気遣いのあるコミュニケーションは、高齢患者に非常に敏感に伝わるものと推測される。ときに高齢者のコミュニケーションは、情報処理と伝達において加齢による身体的変化、心理・社会的変化の影響を受ける。難聴や理解力の低下のために会話困難や疎外感を感じるようになる。つまり、高齢患者のペースを考慮した会話は、自分への関心の明瞭さを感じ、より安心を齎すと考えられる。学生は、タッチング・マッサージなどの《非言語的コミュニケーションの必要性》を実感し、高齢患者の反応をみながら皮膚感覚刺激にはたらきかけ、言語的コミュニケーションと併用したことで【対話することの関係性】として高齢患者の心理面の理解に努めることができたと考えられる。

3) 高齢者のニーズや希望に応じる支援

高齢患者に対するケアには、呼吸困難のための安楽な体位の工夫、痛みの軽減など苦痛のない環境づくりとして《安心できる援助の必要性》を述べていた。ほかに、対話から得られた《高

齢者のニーズの把握の重要性》に気づきながらも、学生の捉え方が食い違うことで、《「今」必要な援助を見極める力》の難しさを感じていた。高齢者の理解には相互作用を通して確認や修正をし、その全体像をつくり上げ、時間をかけて理解を深めていく必要がある¹⁵⁾。しかし、多重疾患など複雑な高齢患者の対応は、緊張や戸惑いのほかにその人の発言や状況などを関連させ、意味を自ら考えることは難しいため、高齢者のニーズを捉えることをより困難にしていると思われる。学生は、高齢者のニーズを把握しながら支援を模索するなか、《その人の心に寄り添う》では [人間の心は常に揺れ動いていることを実感した] [寄り添うことの大切さ] を学ぶことができていた。多様な【高齢者のニーズや希望に応じる支援】として、高齢者の反応を読み取り、さらに読み取った反応を理解しようと努力し、相互作用を続けることは、ゆがみのない、真のニーズに反映できると考えられる。ニーズを把握して支援するには、高齢者の生活歴や人生観、価値観に関する情報を統合し、全体像を捉える力を高められるような教育内容がこれまで以上に求められていると考えられた。

4) 看護実践力の必要性

看護実践においては、人間の尊厳や医療安全の確保に関わる深刻な問題につながる。2018年「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業到達時目標」では、6つの能力群と、25の看護実践能力を示され¹⁶⁾、看護実践の能力獲得が求められる。実習病棟において学生は、入院生活全般の援助、廃用性症候群の予防、多重疾患や認知症への対応などの看護実践を行った。加齢や障害のために自立が期待できない高齢患者に対して、《意欲を高めるリハビリテーション看護の実践》として [ADL支援] [残存機能] などの援助を行い、《高齢者への個別的な看護実践》として [アセスメントの必要性] を改めて理解し、《高齢者の状況に合わせた技術の必要性》に気づくことができていた。回復期は、急性期を脱し、治療やリハビリテーションを受けるなかでさまざまな身体機能が向上していき、そのとき最も避けたいのは転倒・転

落である¹⁷⁾。学生は、[転倒リスク][イメージしやすい声かけ][休息をとり実践する]という、再転倒への予防の重要性や疲労感を配慮しながら看護者が行う日常生活支援の対応をじっくり観るなかで【看護実践力の必要性】について体得していたのではないかと考えられる。この学びは、看護を实践する基盤となり、看護実践能力の習得に繋がっていくことが考えられる。

5) 自分の世界を生きる

高齢患者の多くは失語症や構音障害、がんや認知症など、複数の疾患や機能障害を抱えていた。言語で表現することが困難となり、自ら訴えることがないこと、幼い頃を追体験する語りは、学生にとって本人の意思を汲み取る難しさが見受けられた。《高齢者の尊厳への配慮》として、意思疎通が困難でも[自尊心の配慮をする]ことに気づき、本人の意思表示を捉えようとしていた。状況や体調など日々の変化を考慮し、[人生の先輩]として誠実に関わることは、高齢者一人ひとりの[価値観の違いを知る]ことを体験でき、さまざまな人生事情に自らの感情を一致させることで《老年観の再認識》をしたうえで【自分の世界を生きる】存在を学んでいたと考えられる。学生の誠実であることでみえること、わかること、感じることできたと推察され、倫理的感受性を高めることに繋がると思われる。日々でいねいに繰り返し行われるケアに意味があり、価値があることを伝え続けていく必要があると考えられる。

6) 高齢者の生活を支える視点

【高齢者の生活を支える視点】では、高齢患者は生活者であり、入院の前にも退院後にも生活がある。退院後は何らかの障害をもち、以前のような生活様式では過ごせない可能性もある。看護師やリハビリスタッフの関わりから[高齢者のできる部分を見つけることを考える][自立支援の必要性を知る][どんな生活をしてきたのかを考える]ことに気づき、《高齢者のできることに着目した自立支援》、《その人らしい生活の視点の理解》を学んでいたと考えられる。しかし、このような高齢患者の入院をどう捉え、どう位置づけるか、どのような生きがいを感じて

暮らしていたのか、までを把握し“生活の支援”に結びつけて実践するには至らなかったことも含まれていると考えられる。高齢者が暮らす場所も、地域包括ケアシステムにより、地域へと拡大し、多様化している¹⁸⁾。先行研究では、健康な高齢者と接した後の看護学生は、高齢者の持てる力を認識し¹⁹⁾、また自宅で自立生活している高齢者へのライフヒストリー・インタビューを取り入れた学習効果²⁰⁾が報告されている。早い段階から元気な高齢者の状態を知ること、回復支援する上で必要となると思われる。今後、講義や他領域の実習との関連を考慮した実習フィールドを検討しておく必要があると考えられる。

7) 多職種連携・協働

病棟においては、医師、看護師、リハビリスタッフ、MSW等のチーム体制で、平等な立場で協働なケアを提供していた。また、同時期に、看護学生以外の職種の実習生を受け入れていた。これらの専門職チームに学生が加わり、《個別ケアのための多職種連携・協働》として[自分の専門以外に対する理解の重要性を学ぶ]ことができていた。学生は、チームの一員としてのケアを体験することで、同時に病棟で支える多職種の働きも見てきたのではないかと思われる。《看護職に求められる連携力》として、高齢者から得られた情報をいかに共有化し、多職種にわかりやすく伝えることは[看護者としての代弁者]になることを捉えていた。多職種カンファレンスに参加した学生は、看護師と多職種が互いの知識・技術を提供しあえる、良好な関係を観察し、看護師の存在の重要性やチームワークによって成り立つことを、より実感し認識できたと考えられる。藤田らは²¹⁾、専門職連携教育、同職種間のサポート、多職種とのディスカッションやコミュニケーションの機会の必要性を示している。【多職種連携・協働】について、日々の患者と向き合い、多職種と連携・協働する看護師の姿勢は、看護の専門性としての役割理解に繋がられたと考えられる。

8) 社会的ネットワークとサポート

退院後、安定した状態を維持していくには高

高齢者自身がセルフケア行動をすることが求められる。亀井は²²⁾、「利用者・家族は、看護職との関係ができてくる中で、看護職の情報に耳を傾け、自らも情報を求めてくる傾向がある」と述べている。学生は、生活機能の維持と向上のための看護支援をしながら、高齢患者の退院後の生活を想定して〔入院中から退院後の生活を考慮した援助〕について考え、《入院時からの退院支援の必要性》を認識していたと考えられる。また平均世帯員の減少から、早期に退院しても家で介護をしてくれる家族がいない、退院先が自宅ではなく、介護保健施設になることも少なくない。高齢患者と家族の意向を把握しながら、《家族への支援》、《高齢者の背景に応じた社会資源の活用》方法を学んでいたと考えられる。家族を含めた援助の必要性については、実習だけではなく学内における学習においても要点として教授している内容である。【社会的ネットワークとサポート】について、家族構成に合わせた支援の必要性を捉えていると考えられる。

9) 学生自身の自己課題の発見

高齢患者から〔気遣い〕の言葉をかけてもらい〔ケアへの感謝を感じる〕ことができ《個性のある看護の重要性を実感》することができたと考えられる。〔患者からの言動でやりがいを感じる〕学生は、《人との繋がり大切さ》を実感したと思われる。太田は²³⁾、「人間にとって短絡的な承認と長期的な承認どちらも大切である」と述べている。他者に受け入れられことは、喜びとやりがいを感じ、達成感に繋がっていると考えられる。《学びの深まり》として、〔高齢者の疾患に関する知識の確認〕ができ、高齢患者1人ひとりに触れ、同じ疾患でも捉え方が異なることで、〔介入の難しさ〕を体験して、改めて自己の《継続的課題の明確化》ができたと考えられる。老年看護学病院実習を通じて、【学生自身の自己課題の発見】を実感した結果と考えられる。

VI. 結論

老年看護学病院実習で学生は、【加齢に伴う個体差】【対話することの関係性】【高齢者のニーズや希望に応じる支援】【看護実践力の必要性】【自分の世界を生きる】【高齢者の生活を支える視点】【多職種連携・協働】【社会的ネットワークとサポート】【学生自身の自己課題の発見】の9つの視点から学びを得ていることが明らかになった。今後は福祉施設実習での学生の学びの関連についての検討が必要である。

VII. 本研究の限界と課題

本研究は、学生の老年看護学病院実習終了後のレポートを分析としたことから、学びの全てを検討するには限界がある。実習の時期や体験によって得られる学びは各施設によって異なることが予測されるため、福祉施設実習における学生の学びを行い、効果的な実習方法・評価方法について検討することを課題とする。また、「学士課程教育におけるコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」は、6つの能力群と25の看護実践能力を示している²⁴⁾。これらは単独の能力ではなく、看護実践に必要な多面的な要素を含む総合的な能力として捉えるため、今回の学びの内容と看護実践力の関連性を検討していきたい。さらに対象者を他大学や3年課程看護師養成所の看護学生にも広げて検証していきたい。今後、2022年からの新カリキュラムに向けて、学生が高齢者への理解を深められるように、老年看護学実習の看護実践と教授方法を結びつける活動に取り組みたいと考えている。

謝辞

本研究にご協力くださいました学生の皆様に、心より感謝いたします。なお、本研究の一部は日本老年看護学会第24回学術集会において発表した。本論文内容に関する利益相反事項はない。

引用文献

- 1) 内閣府：平成29年度版 高齢社会白書。2.日経印刷。
- 2) 総務省統計局 (2020)：統計からわが国の高齢者「敬老の日」にちなんで。 <https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1260.html>。(2020年9月20日)(2020年11月17日参照)
- 3) 厚生労働省。平成29年患者調査の概況。2017 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/index.html> (2020年11月17日参照)。
- 4) 厚生労働省。保健医療2035提言書。平成27年6月策定懇談会。 <https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/shakaihoshou> (2020年11月17日参照)。
- 5) 文部科学省。大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会。2011。 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afeldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf (2020年11月17日参照)。
- 6) 厚生労働省。看護教育の内容と方法に関する検討報告書。2011。 <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y.html> (2020年11月17日参照)。
- 7) 加藤真紀，梶谷みゆき。老年看護施設実習における学生の学びと指導上の課題の検討。島根県立看護短期大学紀要。2006；12：79-90。
- 8) 福田峰子，安藤好枝，田中和奈。老年看護臨地実習における学生の困難状況と対処行動－第一報実習初期における困難状況の実態－。生命健康科学研究所紀要。2011；18：91-105。
- 9) 鳥羽研二，系統看護学講座専門分野Ⅱ老年看護病態・疾病論第5版。医学書院。2020；2。
- 10) 内閣府。平成29年度版 高齢社会白書。22。日経印刷。
- 11) 舟島なおみ。看護教育における授業展開。東京。医学書院。2013；173。
- 12) 宮地緑，松本光子。看護学実習ハンドブック基本的考え方とすすめ方改訂4版：金芳堂。2010；96。
- 13) 千葉真弓，原田美香，細田江美，他。介護老人保健施設での老年看護実習における学生の学び。長野県看護大学紀要。2008；10：21-32。
- 14) 三輪のり子，金原京子。ゆとり世代の看護学生における高齢者観の特徴「普段みたり聞いたりする像」「将来なりたい像」「将来なりたくない像」「自分にとっての存在」の視点から読み解く。日本老年看護学会誌。2015；19(2)。47-57。
- 15) 鳥田美紀代。老年看護学概論「老いを生きる」を支えることとは。正木治恵，真田弘美編。南江堂。2020；78-79。
- 16) 一般社団法人日本看護系大学協議事務局編。看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標。2018。
- 17) 内野聖子。回復期にある高齢者の看護。島内節，内田陽子編。これかの高齢者看護学－考える力・臨床力が身につく－。東京。ミネルヴァ書房。2018；245-249。
- 18) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング。地域包括ケア研究会。地域包括ケアシステムと地域マネジメント。地域包括ケアシステムに向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業書報告書；2016
- 19) 樋田小百合，熊田ますみ，他。健康高齢者との関わりによる看護学生の高齢者イメージ。岐阜医療科学大学紀要。2014；8：7-15。
- 20) 小泉美佐子，伊藤まゆみ，宮本美佐。老年看護学の対象理解にライフストーリー・インタビューを取り入れた学習効果。老年看護学会。2000；5(1)。140-146。
- 21) 藤田厚美，習田明裕。回復期リハビリテーション病棟看護師の多職種連携実践能力に関する要因。日本看護科学会誌36。2016；229-237。

- 22) 工藤禎子. 高齢者が地域で暮らすための社会資源. 亀井智子, 小玉敏江編. 高齢者看護学第3版: 中央法規出版株式会社; 2018. 89-92.
- 23) 太田肇. 承認欲求. 東洋経済新潮社. 2013; 90.
- 24) 厚生労働省. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf
(2020年11月17日参照).

〔 受付日 2020年11月24日 〕
〔 受理日 2020年12月22日 〕

Student learning in geriatric nursing hospital training

Sachiko Suzuki¹⁾ Chiyoko Shimizu²⁾

¹⁾ Department of Nursing, Ashikaga University ²⁾ Former Department of Nursing, Ashikaga University

Abstract

【Purpose】 The present study aimed to clarify student learning in geriatric nursing hospital training and to develop this into a foundational resource for enriching geriatric nursing training instruction.

【Methods】 A total of 143 third-year students at University A undergoing geriatric nursing hospital training consented to participate. We examined their learning through an overview and training in aged patient care

【Results】 The following categories of student learning were extracted: individual differences associated with aging, relationship in having conversations, support for requests and needs of aged people, necessity of practical nursing competencies, living in one's own world, perspectives in supporting an aged person's daily life, multidisciplinary collaboration and cooperation, social networking and support, and discovery of students' own challenges.

【Conclusion】 Based on the content of student learning, the importance of training was confirmed. With the increasing number of aged people and continual diversification and changes in families, the ability to take a holistic approach for treating aged people is in demand. It is therefore necessary to consider training methods in a broader field. Furthermore, the practice of multidisciplinary and professional collaborative education, aiming for the promotion of a comprehensive community care system, is necessary.

Key words : geriatric nursing training, hospital, report, student learning